

九、文學上の理想の作品は必ず内容的と藝術的との兩價値を共有してゐる。

## 第二章 節

本書に於ける節の名稱は、現代ではあまり使用されてゐない。しかし、この名稱を使用する方が初學者には最も理解され易く、またかやうに名づけるのが最も正當であると考えたからこれを用ひた。

この節の中、從來種々に論せられたのは述語節である。あの故草野清民氏が唱へ出した文主説の如きもこの部に屬するもので、「象は體大なり」「日本は人口が多い」の文の象は「日本はを文主（或總主）」と論するのであるが、此等はいづれも本書のやうに述語節として論するべきものであると思ふ。

## 練習

次の文から節を抜き出し、その種類を説明せよ。

- 一、一旦事あらば（修飾節）
- 二、欲深き（修飾節）  
その心常に貧しく（述語節）  
欲なき（修飾節）  
その心常に富めり（述語節）
- 三、大厦高樓の櫛比せし（修飾節）
- 四、盲人の杖を失へるに（補語節）
- 五、雨の面白いのは（主語節）  
燕子花・花菖蒲・あやめなどの咲亂れる（修飾節）
- 六、鵜船が下りて來るのを（客語節）
- 七、月落ち、烏啼いて（對立節）

## 第三章 文の成分の倒置及び省略

本章に於ては別に説明することはないが、たゞ省略された成分を補ふ場合に特に注意

すべきことは、(一)如何なる場合にも必ず文法の見地から補ふこと、(二)述語以外に用ひられた用言は、修飾語の部にも説明したやうに、時には主語を必要としないことがあることとで、修辭學の知識を濫用してはならない。

### 練習

次の文の成分を常の位置に改め、且その省略された語を補へ。

- 一、諸職人(は)正月の顔になりけり。
- 二、福は内(に入れ)、鬼は外(に出よ)。
- 三、(彼が)天下の儀表となり、古今の龜鑑となれること(は)宜なり。
- 四、(兄は)かの山の紅葉こそ(美しからめ)とて、友とともに出で立つ。
- 五、(予は)雪(を)ふみわけて君を見んとは思ひきや。
- 六、月色(は)美なるかな、春色(は)美なるかな、(予は)實に乾坤の美妙を感ず。
- 七、あなたはどちらから(いらつしやいましたか)。

(私は)京都から(まゐりました)。

(あなたは)いつ(京都から)いらつしやいましたか。

(私は)昨日(京都から)まゐりました。

八、(汝は)(予が)今いつたことをきつと忘れるな。

九、(諸子は)ならぶ山なき不二よりもなほいや高き父の恵をあふぎ見よ。

一〇、(予は)昨日參上致し候處、(君は)御不在にて(予は)拜顔を得ず、誠に残念に存じ候。

### 第四章 文の組織上の種類

本章に於ても特に説明するほどのことはないが、たゞ單文の場合に、思想上何回主語、述語の関係が結ばれても、文法上の形式で一回だけその関係の成立するものが單文であるから、特に「文法上の形式」といふことに注意していただきたい。

### 練習

次の文を文の組織上から説明せよ。

- 一、重文
- 二、單文
- 三、單文
- 四、複文
- 五、重文
- 六、不完全な單文
- 七、複文
- 八、複文を含む重文
- 九、複文
- 一〇、重文を含む複文

(をばり)

大正十二年一月二十三日 印刷  
 大正十二年一月二十六日 發行  
 大正十四年九月一日 修正再版印刷  
 大正十四年九月四日 修正再版發行

現代日本文法教授備考

著 作 者

東京開成館編輯所

著作權所有

東京市小石川區小日向水道町八十四番地

【品 賣 非】

印 發 者 兼 刷 行 者

株式會社 東京開成館

代 表 者 西 野 輝 男

發 行 所

東京市小石川區小日向水道町八四  
振替貯金口座 東京第五〇貳貳番

株式會社 東京開成館

終